

## 第7章 生活に関わる価値観・ジェンダー意識

羽瀨 一代（弘前大学）

本章では生活に関わる満足度、価値観、ジェンダー意識について結果をみていきたい。

### 7-1. 生活満足度

若者の生活満足度や幸福を決定する要因については、主として将来の見通し、経済的要因、ライフステージ、人間関係、恋愛などの状況が想定される。青少年研究会がおこなった、都市の若者を対象とした研究においては、①将来の見通しが明るさ、②経済的ゆとり、③人間関係が良好かどうか、が生活に満足しているという結果が報告されている（浅野 2016）。そのいっぽうで、④結婚の有無や⑤恋人の有無は関連がみられたり、みられなかったりという微妙な結果であった。そして、年齢やジェンダーによって異なる要因が生活満足度を規定しているということも示唆された（羽瀨 2016）。

生活満足度の規定要因を探る際、調査対象となる若者の居住地域や年齢、さらには質問の仕方によってその結果が異なるのではないかと考えられる。青少年研究会の調査対象が16歳から29歳の都市生活者であることを考えると、仕事の状況や結婚、恋愛が人生の重大事となるかどうかは微妙なところであると言わざるをえない。20歳から39歳の地方の若者を調査した轡田によれば、生活満足度に地域間格差はないとしながらも、地方の若者にも収入と生活満足度との正の関連があることを報告している（轡田 2017）。また轡田は業務の内容なども分析をおこない、仕事との関連も報告している。人間関係については、友人関係などと生活満足度との関連を明らかにしている。しかし、青少年研究会の結果とは異なり、結婚の有無については正の相関があるという結果を報告している。そして将来の見通しが配偶者や恋人の存在と結びついていることも指摘している。おそらく、この相違は轡田の調査対象者が20代、30代と年齢層が高いこと、地方居住者であることなどが要因となっている可能性がある。

本調査も20代、30代の地方居住者であることを考えるならば、これらの生活満足度に関する仮説は轡田の結果と同様の傾向を示すと考えられる。比較的観点からの結果については、第11章で後述されるため、ここでは基本的な状況を確認する。以下、生活満足度に関して、分析結果を紹介していこう。図1から、おおむね経済的な満足は低く、時間的ゆとりや住居の快適性といった質的満足が高い傾向がみられる。次に総合的な生活の満足度と相関する項目を確認していこう。

#### ①将来の見通しの明るさ

総合的な生活満足度を決定する要因の一つとして将来の見通しがある。青森の若者においても同様の傾向がみられた。「20年度、自分は親の生活水準よりも高い暮らしができていると思う」や「今後、自分の生活が経済的に厳しくなる可能性について、心配しなくてもいいと思う」といった将来の見通しが明るい場合、総合的な生活満足度が高い（相関分析： $p < .001$ ）。また「今後（配偶者がいない場合）結婚できないのではないかと、（既婚の場合）結婚生活を続けられないのではないかと、心配しなくていいと思う」や「20年後、子育てを経験し、自分を必要とし大切に思ってくれる人（配偶者・恋人）と暮らしていると思う」といった親密な人間関係の将来的見通しが明るい場合、現在の総合的な生活満足度が高い（相関分析： $p < .001$ ）。これらのことから、経済的にも親密な人間関係においても将来の見通しが明るいならば、現在の生活に満足が得られるといえる。

#### ②経済的ゆとり

総じて経済的ゆとりと生活満足度と相関するようである。個人収入も世帯収入も生活満足度との相関はみられる。ただし、ここでは数値を示さないが「金銭的余裕のある生活を送っている」という項目よりも「一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は高いほうだ」という意識のほうが生活満足度と強い関連がみられるという結果であった。つまり実際の収入や金銭的余裕の意識も生活満足度と相関するが、他と比較することで生活満足度の意識は決まるようである。

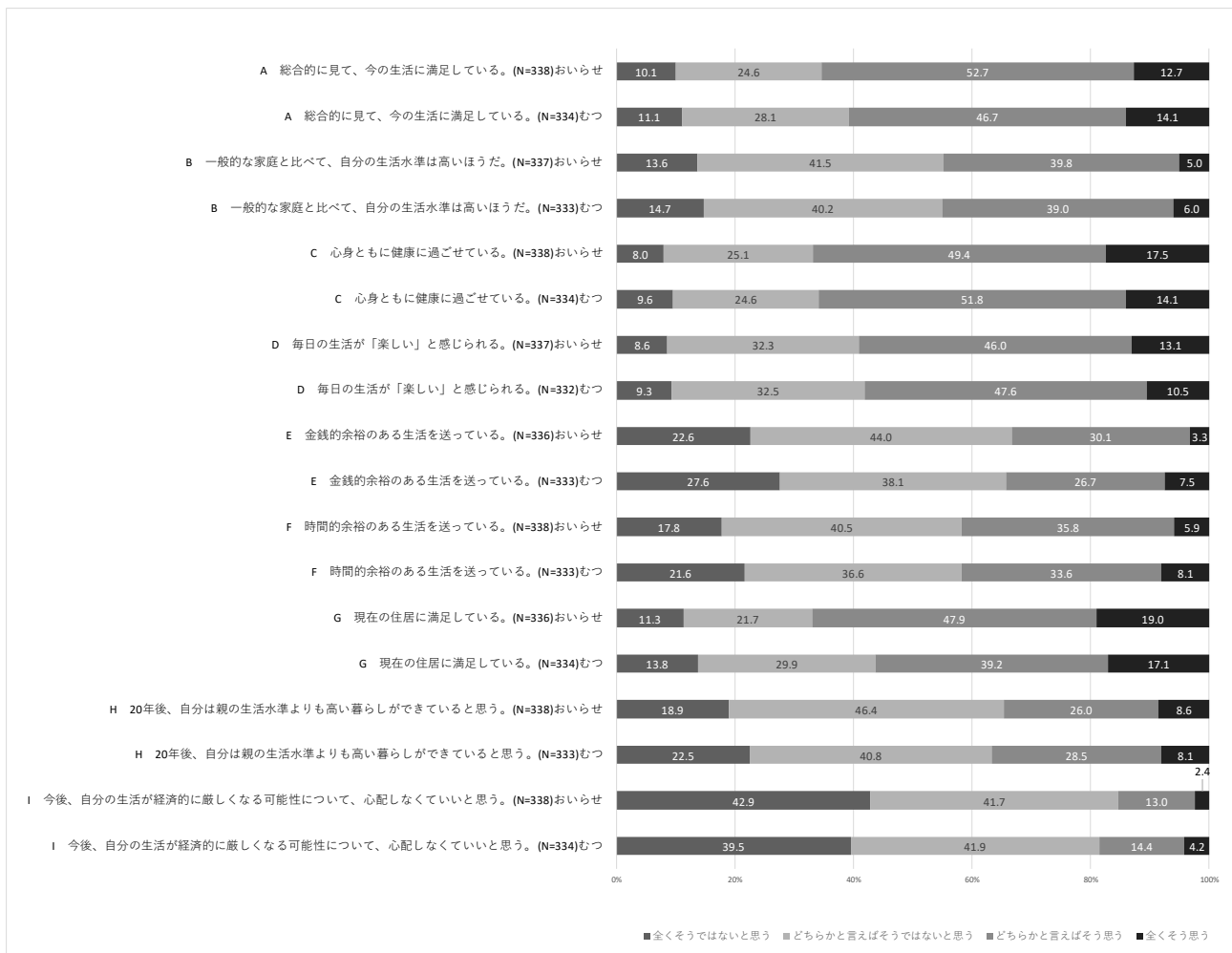


図1 むつ市とおいらせ町における生活満足度

### ③人間関係

まず結婚の有無について、配偶者がいるほうが独身者（離死別を除く）と比較して生活満足度が高いということがわかった（T検定： $p < .001$ ）。しかしジェンダー別に分析をおこなった結果、むつ市では女性のみ正の相関を示し、おいらせ町では男性のみ正の相関を示している。このジェンダー差・地域差は何を意味しているのか、本結果のみではわからない。むつ市とおいらせ町のどのような地域構造がジェンダーと結婚に作用し、それらの属性が生活満足度との連関を決めているのか、より詳細な分析が必要であるだろう。

さらに独身者の親密な人間関係を考える際に恋人の有無という観点も確認しておきたい。恋人の有無と生活満足度との関連は弱い相関であるため、満足度を決定しているというかどうかは微妙であると言わざるを得ない。連関がないとはいえないという

次に、人間関係の満足度と生活満足度との関係はどのようになっているだろうか。親との関係、血縁以外に自分を必要とし大切に思ってくれる人（配偶者・恋人等）の関係、友人関係の満足度と相関がみられた（相関分析： $p < .001$ ）。それぞれ人間関係満足度が高い人は生活満足度が高い。

### ④地域に対する満足度

トランスローカリティという概念を本研究会では提唱しているが、地域性を超えた地域性とでも説明できるような状況を実証的に説明したいと考えている。生活満足度に地域間格差はみられないと先行研究では示されているが、もしも地域満足度と生活満足度に連関がみられないのであれば、それはどこに住んでいても生活満足を得ることが可能である、という結論を導くだろう。そこで、その可能性を探究するべく、地域に対する満足度と生活満足度との関連を分析してみたい。

ただし常識的に考えるならば、地域満足度が高ければ生活満足度は高く、地域満足度が低ければ生活満足度も低いはずである。そして本調査でも地域満足度と生活満足度は正の相関がみられた（相関分析： $p < .001$ ）。ただし、現在住んでいる地域に満足していないが、総合的に生活に満足しているという回答がむつ市で31.9%、おいらせ町で11.5%であった。むつ市のような結果は、地域が生活満足度に関わらな

い可能性を示している」と解釈することが可能であり、トランスローカリティのあり方を探究するうえでは興味深い結果となった。

#### ⑤小括

以上の結果から、本調査においても生活満足度を決定する要因はおおむね先行研究で指摘されているとおりの傾向があった。①将来の見通しが明るいこと、②経済的ゆとりがあること、③人間関係に満足しているかどうかということが生活満足度と関連する。それに加えて、本調査で仮説的に得られた結果は、②客観的な経済状況よりも主観的な意識、つまり経済的ゆとりとは他者と比較した際に自身の生活水準が高いと感じられるかどうかと生活満足度と関連しているのではないかとということである。また④地域に対する満足度は生活満足度と相関するということがわかった。

### 7-2. 生活価値観とジェンダー意識

次に趣味や生活文化に関わるジェンダー意識を確認していこう。

#### ①生活文化

若者の趣味に関わり現代社会をより特徴づける議論がいくつかある。たとえば、おたくやヤンキーという文化行動や生活文化の嗜好による分類である。とくにおたくは現代社会の若者の人間関係やコミュニケーションを先鋭的に特徴づけると説明されてきた。また、ヤンキーという日常文化のあり方は、都市と地方を比較し、地方在住の若者に特徴づけられると説明されてきた。青少年研究会調査によれば、おたく的趣味をもつ都市の若者は2002年と比較して、2倍を超えて増えている（羽瀨、2016）。本調査においてもおたく的趣味をもつ若者はむつ市で51.0%、おいらせ町で44.8%であった。また年齢が若くなるほどおたく的趣味をもつようである（相関分析： $p < .001$ ）。ヤンキー的な趣味をもつ若者はむつ市で8.1%、おいらせ町で11.3%であった。居住地域や年齢などの社会的属性との相関はみられなかった。

表1 趣味

	おたく的趣味	ヤンキー的趣味	趣味に個性やこだわり
むつ	51.0 (171)	8.1 (27)	58.5 (196)
おいらせ	44.8 (151)	11.3 (38)	54.5 (183)

#### ②ジェンダー意識

ジェンダー意識についての調査は蓄積があり、性別役割規範意識は低下している傾向が報告されている（石川、2018など）。しかしその意味は女性の二重労働であったり、結婚や子どもをあきらめたりという負担がこれまでも指摘されてきた。性別役割規範を否定するという態度形成は、実際の行動とのギャップをもっている可能性がある。つまり、負担とのバーターとしてキャリア形成であることを隠蔽するものであるかもしれない。性別役割規範意識が低下していることをもって、ジェンダーの差別構造がないとはいえない。先行する意識調査を確認しても8割程度の日本人は「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という性別規範に否定的である。また本調査でも同様の傾向が認められる。

しかし、実質的に誰が生計を維持する責任を担うのか、誰が家事や子育ての責任を担うのか、と問うならば、多くの家族において男性が経済的責任を担い、家事や子育ての責任を女性が担っているようである。その証拠として共働き家庭において、夫と妻の職場が遠く離れているならば、別居して働き続けるケースと妻が仕事をあきらめるケースは多いであろうことは予測されるが、夫が仕事をあきらめて妻についていくというケースはまれではないだろうか。

今回の調査では、「共働きの場合であっても妻は仕事をやめて夫の転勤についていくべき」という性別役割規範を尋ねている。「共働きの場合であっても夫は仕事をやめて妻の転勤についていくべき」かどうかを尋ねてみたかったが、肯定数が少ないことは予め予測可能であったし、そもそもそのような規範が現代日本社会にはない。ジェンダー規範は常識的な意識のなかに潜んでおり強固なものである。性別役割規範などは「現代社会であれば否定しておくことが正しいだろう」という予測のもとに回答される項目だともいえる。

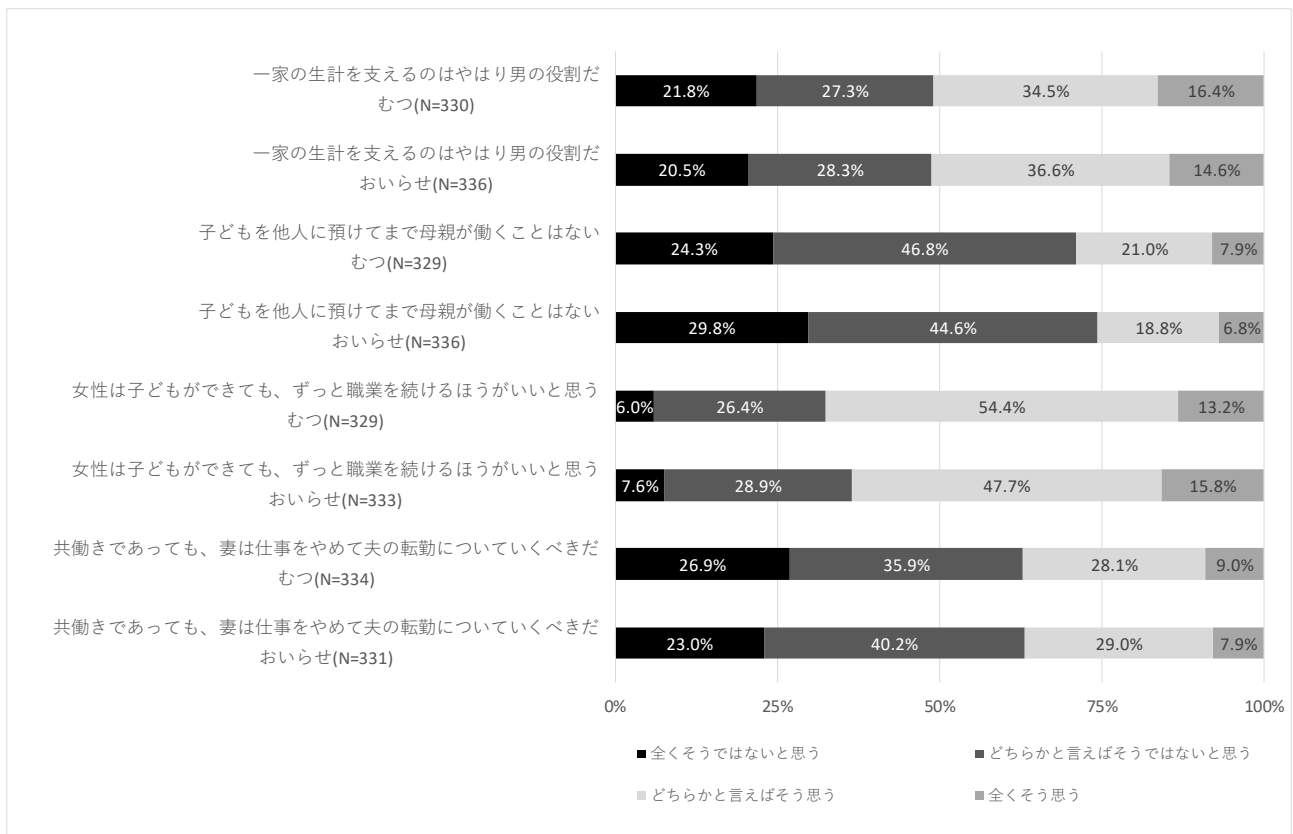


図2 むつ市とおいらせ町のジェンダー意識

今回のジェンダー意識に関する項目についても、常識的に答えやすいだろうと推測される質問を設定している。男女平等を価値としてもつのであれば、「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」の回答分布と同程度になるはずである。しかし回答分布は異なる傾向を示している。つまり性別役割規範が強固なものであることが確認できたといえる。とくに「一家の生計を支えるのはやはり男の役割だ」という項目については約半数が肯定しており、「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という性別規範に否定的な回答とは矛盾する結果となっている。これらのジェンダー項目について、有意な地域差はみられない。それだけ性別役割規範は常識として根付いており、「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という項目が空々しい質問項目となっているかが反対に浮き彫りとなってくる。

### 7-3. まとめ

本調査では、生活満足度が人間関係、経済的ゆとりの主観的意識、将来への見通しなどに関わることがわかった。また、おたく的な文化が20代30代の若者に普及していることや性別役割分業意識が強固であることも示された。しかしむつ市とおいらせ町の比較において有意な差は確認できなかった。したがって、生活満足度や生活文化の享受、ジェンダー的な価値観の相違を地域間格差で説明できないのではないか、という仮説が導出された。

### 参考文献

- 浅野智彦 2016「青少年研究会の調査と若者論の今日の課題」藤村正之・浅野智彦・羽瀨一代編『現代若者の幸福—不安感社会を生きる』恒星社厚生閣
- 羽瀨一代 2016「21世紀初頭の若者の意識」藤村正之・浅野智彦・羽瀨一代編『現代若者の幸福—不安感社会を生きる』恒星社厚生閣
- 轡田竜蔵 2016『平成26年度 公益財団法人マツダ財団委託研究「広島 20-30 代住民意識調査」報告書（統計分析篇）【第2版】』公益財団法人マツダ財団
- 轡田竜蔵 2017『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房